

# 小学校家庭科における生命の教材化(第3報)

— 子どもと保護者の意識 —

The Teaching of The Concept of "Sex and life" in Elementary School Home Economics Class (Part 3) — Consciousness of children and their parents —

高橋 類子\*      木村 節子\*\*      デュッペンターラー恵理子\*\*\*  
Ruiko Takahashe,      Setsuko Kimura,      Eriko Duppenhaler

In teaching the concept of 'sex and life' a survey was administered on the consciousness by children and their parents of 'sex and life'.

The results are as follows:

## I. The children's consciousness of 'sex and life'

1. Consciousness of family life: The family atmosphere influenced their growth significantly.
2. Consciousness of sex: The different sexes showed different attitudes toward the distinctions of male and female sexual physiology.
3. Consciousness of friendship: friend relations were the most important factor for making the children like or dislike their school life.

The willingness to cooperate with the other sex was the stronger among the boys.

## II. Consciousness of parents

The relationship between children and their fathers was somewhat less stable than children and their mothers.

On the basis of the above survey results, we attempted a model of the teaching procedure of this concept in detail.

## 1. 緒 言

性や生命は、人格の中心的部分に組み込まれている本質的条件の一つである。それゆえ、健康で幸福な人生を送るためには、性や生命に対する適応が重要である。なぜならば、その適応は個人における身体的・精神的・社会的側面における生活の充実度に結びついているからである。

生命の教育は、日常生活からはじまっているので、日常のごく普通の行動や態度が、子どもにおける性や生命への条件づけに、はかりしれない程の強い影響を与えている。

本研究では第1報研究<sup>1)</sup>の展望で述べた「生命の教材化・状況・問題の構造的把握」(再び図1に示した)図中の内的事項<sup>\*1</sup>の学習者(子ども)の興味・関心および、外的事項<sup>\*2</sup>に該当する保護者の認識を調査し、授業実践のための教材作り等の基礎資料を得ることを目的とし、研究を進め、さらにその結果をもとに「生命の教材化」の教師側の手続きおよび留意点を検討し若干の知見を得たので、ここに報告する。

\*新潟大学教育学部

\*\*実地指導非常勤講師(元下山小学校教諭)

\*\*\*スイス在住

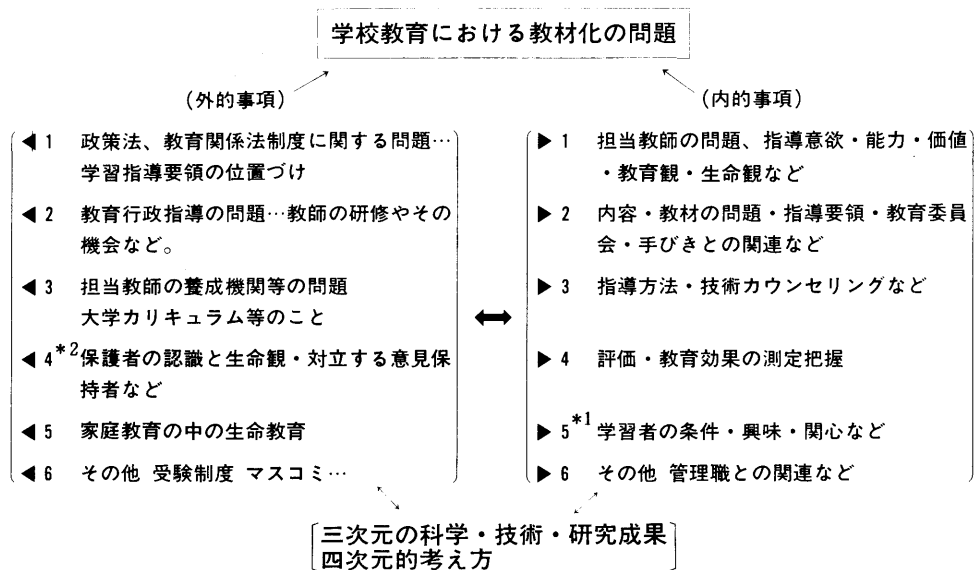


図1 生命の教材化・状況・問題の構造的把握

表1 方法

項 目	概 要	
1. 調査対象	5.6年生290名とその保護者	教育学部附属長岡小学校 長岡市立S小学校
2. 調査時期	昭和57年春期	5年生は具体的初潮指導を受ける前に実施
3. 調査方法回収率	アンケート調査 子ども100% 保護者96.3%	子どもに対しては質問を問いかけて回答する方式。 保護者にはアンケート用紙を封筒に入れて手渡し、 それぞれ家庭で回答してもらい回収した。
4. 調査内容	生命に関する意識調査	I 子どもの生命に関する意識 1.家庭生活に関する意識 2.性に関する意識 3.友人に関する意識 II 保護者の生命に関する意識

## 2. 方 法

方法の概要は表1に示した。調査対象は新潟大学教育学部附属長岡小学校および、長岡市立S小学校の5・6年生290名とその保護者。

調査時期は昭和57年春期、両校とも5年生は具体的な初潮指導を受ける前に実施した。

調査方法は、子どもに対しては質問を問いかけて回答する一斉アンケート。保護者にはアンケート用紙を封筒に入れて手渡し、各家庭で回答してもらい回収した。回収率は子ども100%、保護者は96.3%であった。

調査内容は生命に関する意識調査で、一つは子どもの生命に関する意識にかかわる領域として、1.家庭生活に関する意識、2.性に関する意識、3.友人に関する意識の三領域を設定し、あわせて保護者にも子どもを中心とした生命の意識を調査した。

データ処理：集計は調査個票をパンチカードに穿孔し、本学情報処理センターの計算機ACOS-6により処理した。

$$\text{連関係数 } C = \sqrt{\frac{X^2}{X^2 + N}} \quad N: \text{観測値の総数}$$

## 3. 結 果

### 1 子どもの生命に関する意識

#### 1. 家庭生活に関する意識

1) 家族形態ときょうだい数を図2に示した。家族形態は核家族が63.8%で、三世同居は32.8%、両親健在家族は95%以上であった。父子、母子の単親家族は1.4%あり、単親であっても祖父母同居家族が0.3%あった。

きょうだい数では二人きょうだいが61.7%、三人が29.0%で、合わせると90%を越え、一人っ子は3.8%と3位に位置し、四人きょうだいはわずか1.0%であった。

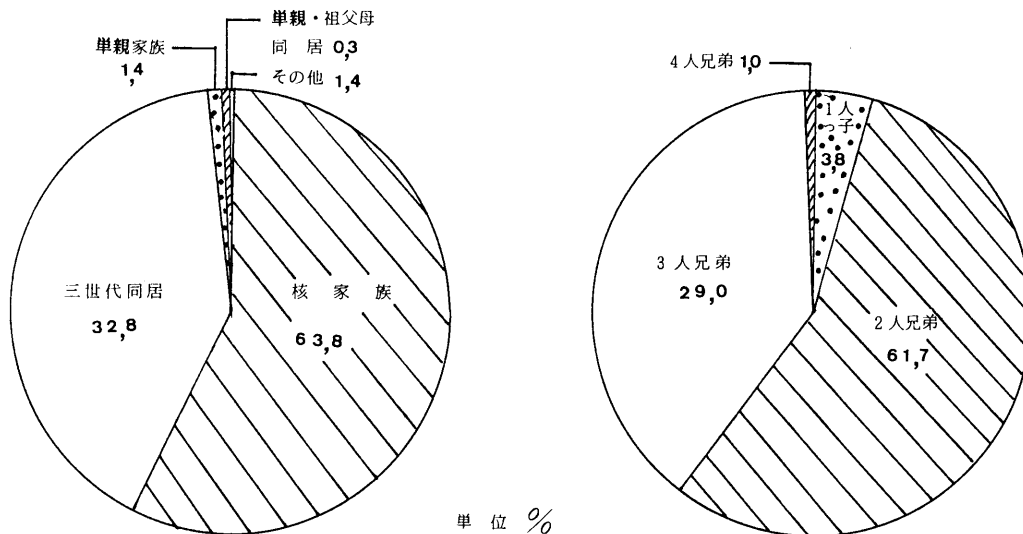


図2 家族形態ときょうだい数

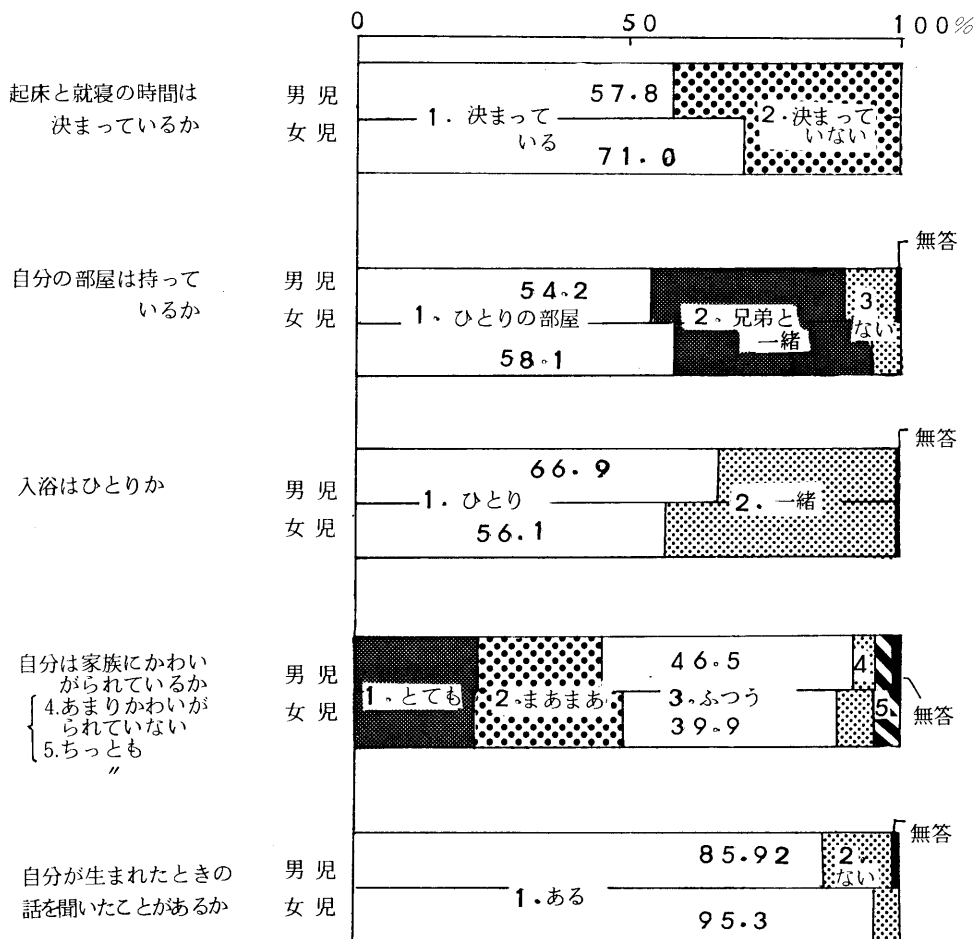


図3 子どもの生活習慣

2) 子どもの生活習慣 子どもの生活習慣の一部を図3に示した。起床と就寝の時間がきちんと「決まっている」子どもは、男女児とも「決まっていない」子どもより多く、男児57.8%、女児71.0%であった。

自分の部屋を持っている子どもは男児89.4%、女児94.6%と多く、「自分ひとり部屋」をもつものはそれぞれ、54.2、58.1%であった。

入浴では、男子で「ひとり入浴」が66.9%、「家族と一緒に」が32.4%で、ひとりで入浴するものが2倍強あった。女児は「ひとり入浴」と「家族と一緒に」が、男児ほどの大差はなくそれぞれ、56.1%、43.2%であった。

自分が生まれた時の話は、ほとんどの子どもが家族から聞いていたが、聞いてない子どもは男児12.7%、女児4.7%あった。

「自分は家族に可愛がられているか」については、男女児とも「ふつう」と答えたものが最も多く46.5%、39.9%を示し、つづいて「まあまあ」「とても」の順に減衰した。

からだを動かす遊びは男女児とも好きで、それぞれ82.4%、67.6%であった。「嫌い」な男児が4.2%、女児2.7%であった。

読書傾向は、「マンガ・コミック」「図書館の本」では性差はなかったが、「月刊雑誌」では女児の読書率が高く、男児の38.7%に対し63.5%と約2倍の比率であった。

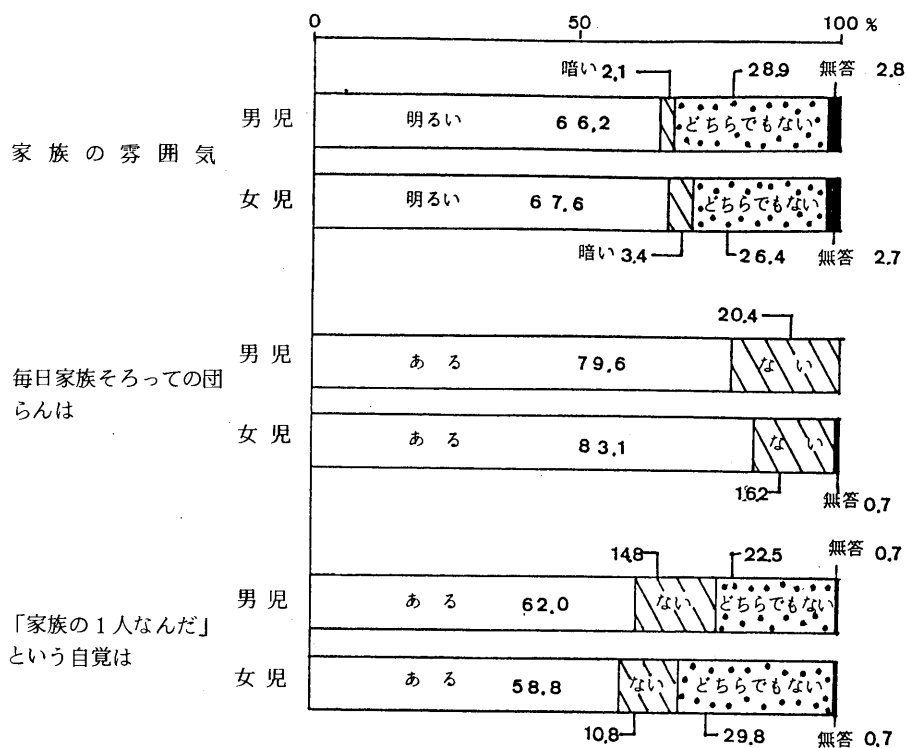


図4 子どもの家庭に対する意識

3) 子どもの家庭に対する意識を図4に示した。「家庭の雰囲気」は「明るい」と思う子どもが最も多く、男児66.2%、女児は67.6%であり、「どちらでもない」は男児28.9%、女児26.4%であった。「暗い」は男児2.1%、女児は3.4%あり、後述する保護者の意識と子どものそれを比較すると、子どもはいずれの雰囲気も保護者よりプラスの意識が高率であった。

「家族そろって団らん」の有無では、毎日家族全員で話をする時間が「ある」が多く、男児は79.6%、女児は83.1%、「ない」が男児20.4%、女児16.2%あった。

「自分は家族のひとりなんだ」という自覚の有無については、「自覚がある」「どちらともいえない」「自覚がない」の順に高率で、それぞれ男児62.0、22.5、14.8%であり、女児は58.8、29.8、10.8%であった。

「家庭の雰囲気」と「家族の1人という自覚」をクロスさせた結果を図5に示した。男児の家族の1人という自覚と家庭の雰囲気との相関は認められず、女児のそれは、家庭の雰囲気が「明るい」「どちらともいえない」「暗い」の順に減衰した。家庭の雰囲気が「どちらともいえない」では、「自覚がない」の比率がいずれの雰囲気よりも多く、男女児各36.6%、41.1%であった。

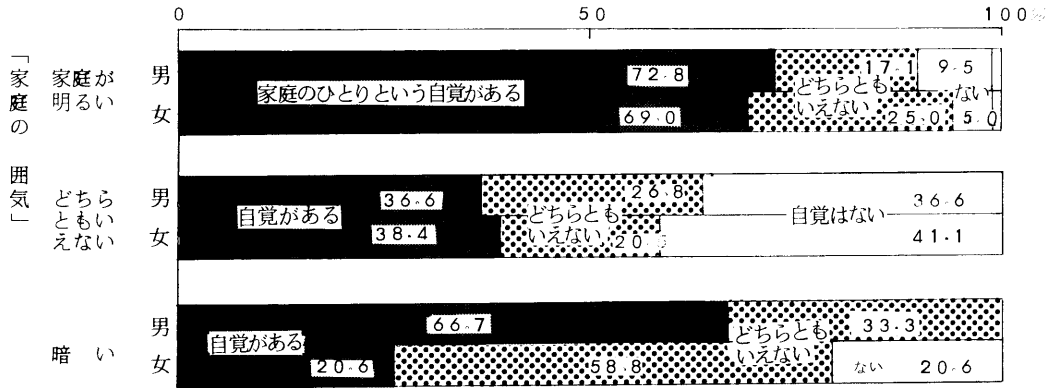


図5 「家庭の 雰囲気」 × 「家族の 1人という自覚」

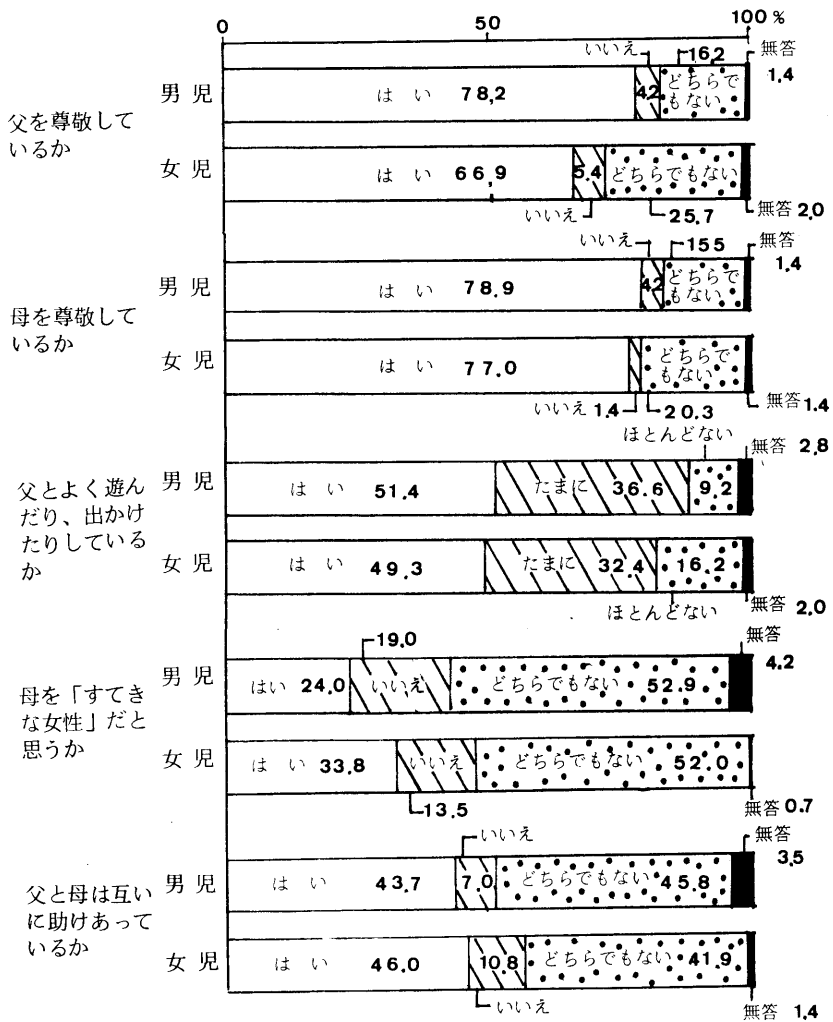


図6 子どもの父母に対する意識

5) 子どもの父母に対する意識を図6に示した。「父を尊敬している」が男児78.2%に対し、女児は66.9%で男児の比率が11.3%高かった。「どちらでもない」では男児16.2%に対し、女児は25.7%で女児の比率が9.5%高く、「尊敬していない」は男児4.2%、女児5.4%であった。

「母を尊敬している」では、男児78.9%、女児77.0%と多く、「尊敬していない」では男児4.2%、女児はわずか1.4%であった。

「父を尊敬しているか」と「自分は家族に可愛がられているか」クロスさせ結果を図7に示した。比率の高いのは父を尊敬していて、可愛がられている男児が72.2%、女児は62.2%であった。この場合可愛がられ方の程度は問題にならなかった。「母を尊敬」と「可愛がられている」のクロス集計でも、尊敬していて可愛がられている比率が高く、男児74.6%、女児71.6%で父の場合と同様、可愛がられ方の程度は尊敬する気持ちに影響を与えなかった。

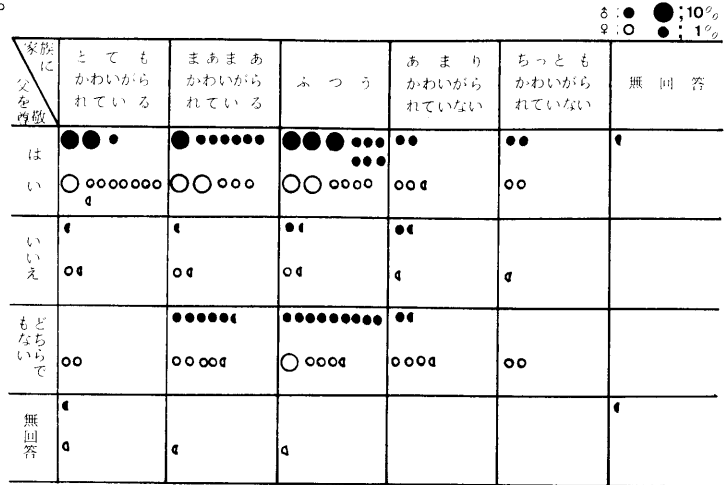


図7 「父を尊敬しているか」×「自分は家族にかわいがられているか」 (8\*\*\*) (9)

場合と同様、可愛がられ方の程度は尊敬する気持ちに影響を与えなかった。

「父を尊敬」と「外出・遊ぶ」とのかかわりについて図8に示した。父を尊敬している子どもは父とよく外出、遊ぶ頻度と相関があり、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の順によく遊ぶ比率は減衰し、逆に「ほとんど遊ばない」比率は順増した。

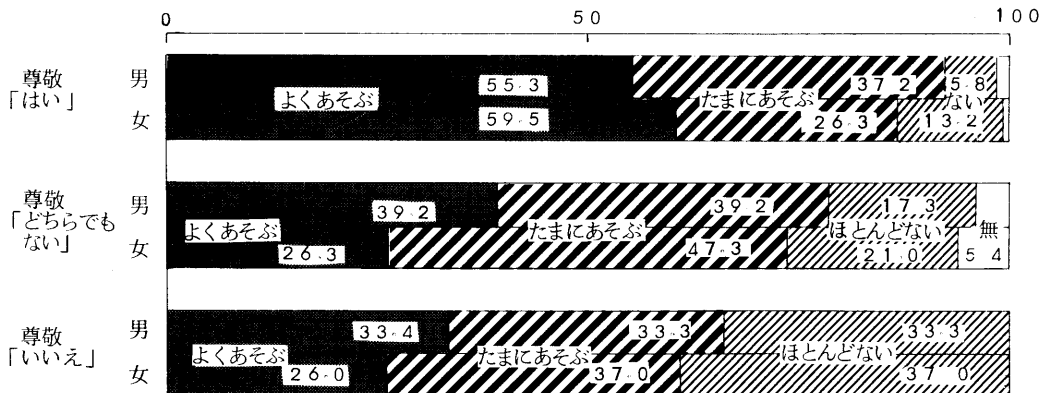


図8 「父を尊敬しているか」×「父と一緒に遊んだり出かけたりするか」

## 2. 子どもの性に関する意識

1) 「男(女)に生まれてよかったか」の結果を図9に示した。「よかった」と満足している子どもは、男児が88.0%、女児は37.8%で性差が33.3%と大であった。「いやだ」と思うものは、男児は0%であったが女児は28.4%もあった。

「男児(女児)は自分を男(女)らしいと思うか」と「その理由」をクロスさせた結果では、男児の最も比率の高いのは、「容貌」その他「趣味」「性格」「動作」であったが集中度は低かった。女児は「しゃべり方」「歩き方」など動作が理由で女らしくないと思うものが最も高率で33.3%あった。

2) 「もし好きな人が出来たらその人とどんなことをしたいか」という問に対し、最も比率が高いのは、男児では「何も

しない」70.4%で、女児は「一緒に遊んだり勉強したい」が60.8%で、このことに関しては性差が著しかった。「結婚」「キス抱き合う」では男児はそれぞれ6.3%と5.6%に対し、女児は2.0%、2.7%と少なかった。

「好きな人が出来たらその人とどんなことをしたいか」と「家庭の雰囲気」をクロスさせた結果を図10に示した。家庭の雰囲気が「明るく、何もしない」と答えた比率が最も高く、性別にみると男児は全体と同じで47.2%、女児は「明るい」と「遊んだり勉強したい」と望む割合が43.2%と高かった。

3) テレビなどで「ラブシーンを見た時どう思うか」と「好きな異性はいるか」をクロスした結果、「いない」で「いやらしい」「エッチすけべ」と思うものが最も多く、男児42.3%、女児37.9%であった。また「いる」ものでも「いやらしい」「エッチすけべ」と思う比率が高かった。ラブシーンを

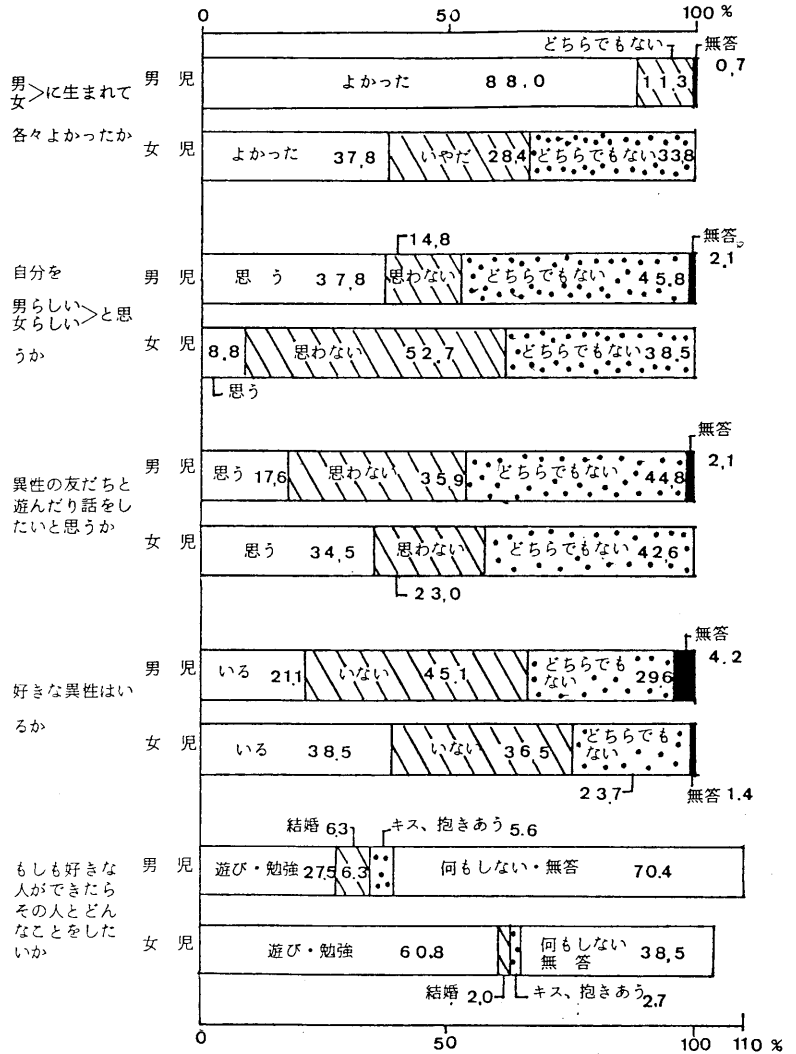


図9 子どもの性意識



見て「経験したい」と思う子どもは男児のみで、しかも好きな人がいるものは100%そう思っており、好きな人がいないものは経験したいとは思わなかった。

「ラブシーンを見た時どう思うか」と「男女の愛情という言葉から受けるイメージ」をクロスした結果を図11に示した。「男女の愛情」という言葉からは、「思いやり、いたわり」を感じ、プラスのイメージを想い浮べる子どもが多く、逆にラブシーンを見た時には、「いやらしい」「はずかしい」「エッチすけべ」とマイ

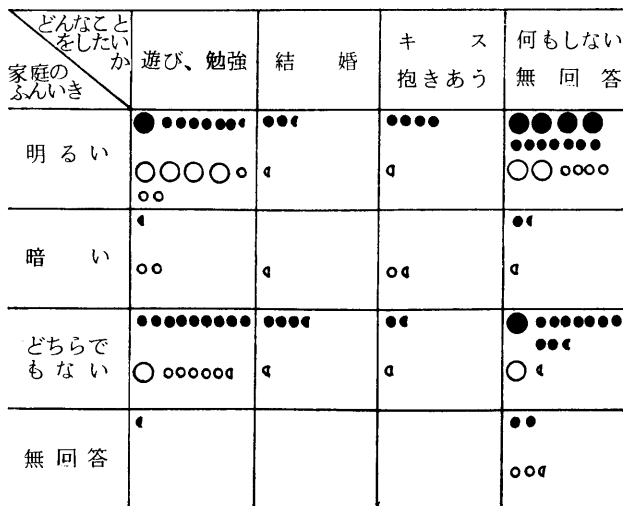
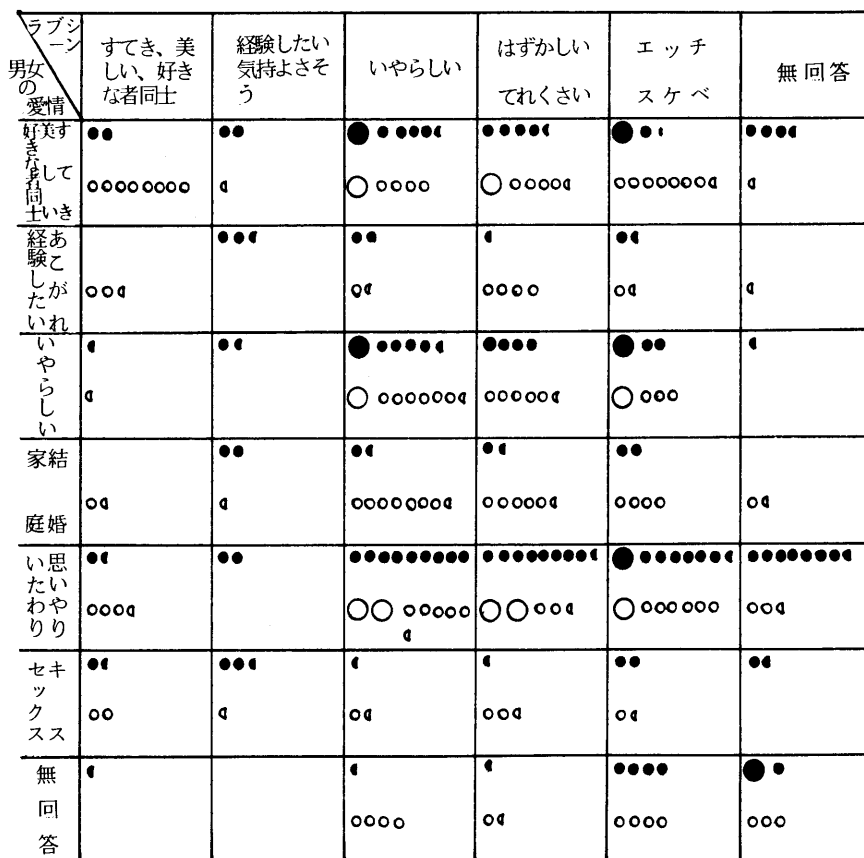


図10 「好きな人ができたら、その人とどんな事をしたか」×「家庭の雰囲気」

ナスのイメージをいだく傾向が強かった。女兒は相関が認められ、男児は分布状態が広く相関は認められなかった。



● : 10%  
○ : 1%

図11 「ラブシーンを見た時どう思うか」×「『男女の愛情』という言葉から受けるイメージ」



5) 「男の子と女の子は、どのように生活すべきか」という間に対しては、男女児とも、「お互いに助け合う」「男女別々に遊ぶ」「異性をからかう」の順に減衰し、男児ではそれぞれ82.5、23.5そして5.8%であり、一方女児は47.3、36.8そして15.7%で、男児が女児よりも協力する気持ちが強かった。

## II 生命に関する保護者の意識

1) 家庭の雰囲気「子どもと保護者の意識をクロスさせた結果を図13に示した。家庭の雰囲気は、「明るい」「どちらとも言えない」「暗い」の順に減衰した。男児の保護者は59.9、31.73.5%で、女児の保護者は62.8、29.7、5.4%であった。これを先に述べた子どもの意識と比較すると、保護者はいずれの雰囲気も子どもよりマイナスの意識に傾いた。

A B 保護者 子ども		1 明るい	2 どちらでもない	3. 暗い	4. 無回答	計 (%)	
						男	女
1 明るい	男	▲▲▲▲▲▲ ●●●●●●	▲▲▲▲▲▲▲▲ ●●●●●●●●	▲▲/	▲▲▲	66.2	67.6
	女	▲▲▲▲▲▲ ●●	▲▲▲▲▲▲ ●●	▲/	▲▲/		
2 どちらでもない	男	▲▲▲▲▲▲ ●●	▲▲▲▲▲▲ ●●	▲/	▲▲/	28.9	26.4
	女	▲	▲▲				
3 暗い	男	▲	▲▲			2.1	3.4
	女	▲▲/	/				
4 無回答	男	▲▲/	/			2.8	2.7
	女	59.9	31.7	3.5	4.9		

図13 「家庭の雰囲気」 児童×保護者

▲ 男児 ● : 10%  
● 女児 ● : 1%

2) 「子どもにとってどんな親でありたいと思うか」の結果を図

14に示した。男児の父親は「厳格な威厳のある親」「尊敬される親」でありたいが、ともに24.7%、女児の父親は「尊敬される親」が最も多く33.7%であった。「無解答」が、男児の父が37.3%、女児の父が29.7%もあった。

母親は「尊敬される親」でありたいが最も多く、男児47.2%、女児43.2%で、次に「友だちのような親」とつづいた。

3) 保護者から見た子どもの性への関心については、「子どもは性に興味関心があると思うか」では興味関心が「ある」と思う男児の保護者は62.7%で、「どちらともいえない」を合わせると、74.2%であった。女児の保護者は「ある」と思うものは71.0%で、「どちらともいえない」を合わせると82.5%になり、女児の方が性に興味関心を持っていると考えている保護者が多かった。

4) 「子どもは性に興味関心があると思うか」と「テレビなどでラブシーンを子どもと一緒に見た時の対応」をクロスさせた結果は、「性に興味関心がある」と思っている保護者で、ラブシーンの対応では、「平然としたまま」が最も多く、男児の保護者は29.6%、女児の保護者は46.6%であった。次は「子どもの表情を見る」で、男児の保護者が22.5%、女児の保護者は24.3%であった。低率ではあるが、「話題にする」という保護者が男女児とも10.1%あった。

5) 「家庭や学校で性教育は必要か」では、男児の保護者で「必要である」が85.2%、「不要である」が10.6%であった。女児の保護者は「必要である」が88.5%、「不要」が8.1%であった。子ど

もたちの意識からは、「自分が成長していく上でのからだの変化を誰から教えてもらいたいのか」の結果では、男児は「父母から」が59.2%、「先生」「マスコミ」とつづき、女児は「父母から」が75.0%でつぎは「先生」「同級生」であった。

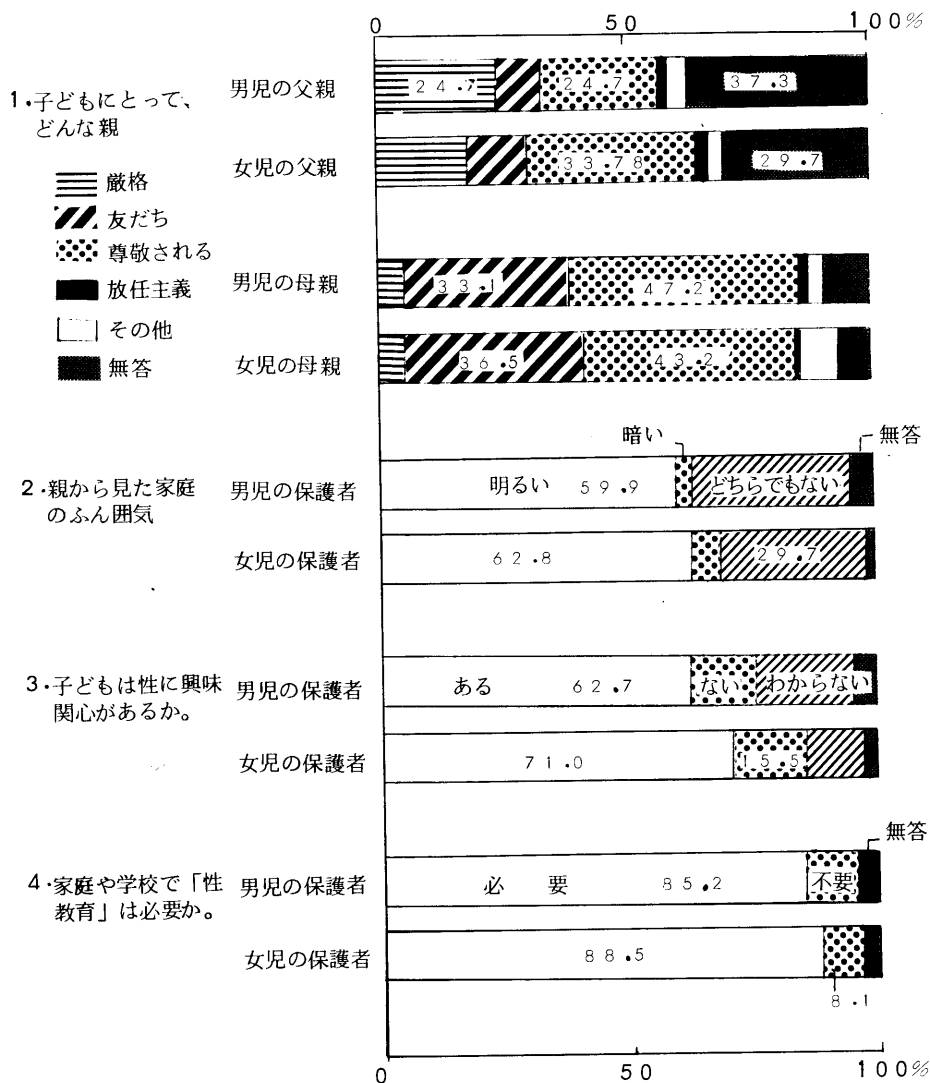


図14 保護者の意識

#### 4. 考察

性と対人関係のための基本的な教育は、家庭において始まる。このことは生命教育の大部分にわたって両親が参加すべきであり、そして、子どもが誕生してからの性と生命の身体的・心理的発達に関する知識を身につけるべきであることを意味しているものである。

家庭生活に関する意識調査をまとめて、強く感ずることは、明るく楽しい雰囲気の中で暮している子どもは「家族の一人」という自己認識が高いことで、家庭は子どもが学校から帰ったら、ほっとするような明るく楽しい雰囲気であることが望ましく、本調査結果からも子どもにとって父母がお互に助け合っていると思う家庭には「楽しくない」家庭は存在せず、父母が助け合う心掛けが家庭を運営

していく基本姿勢として必要かつ大切であろう。本調査では暗い雰囲気の家は少数ながら存在し、そこに育つ子女の将来が懸念される。つまり家庭生活における不満やさびしさが、異性友だちへの関心と短絡的に結びついたり、性関心が高められる要因になることは教育的にみて問題である。特に女子の場合は、男子の性的欲求の高まりかとは別に、愛の欠如や人間関係のさびしさをいやすために、副次的に性行動にはしり易いという報告<sup>2)5)</sup>もあり、誰も<sup>2)</sup>の家庭が明るく楽しくあることを願わずにはいられない。諸般の事情により「楽しくない家庭」で育たなければならなかったにせよ、家庭科の習得<sup>3)</sup>によって、認識は主観的なものから客観的なものへと進むものであり、家庭生活を対象とする家庭科を履修することが、最悪の状態をさけることのできる助けとなった例は数多い。

保護者は、一般的に子どもの年齢に応じて家庭内で、それぞれの役割を果たすことを期待している。特に高学年になると、それは単なる「てつだい」的なものでなく、家庭生活を営む上での重要な仕事を分担してほしい、という期待であることが多い。しかしながら子どもの大部分は、とりわけ男子はそのような仕事をすることを嫌う傾向があり、保護者もいきおい女子のみ家庭の仕事を分担させようとしがちである。わが国の社会にはまだ父親は外で働き、母親は家事を受けもつという固定的な性役割意識があり、子どもの家庭のあり方、社会一般的傾向の影響を受けて、性役割意識はかなり固定的であり<sup>4)</sup>、また男らしさ、女らしさに対する意識にも偏見がみられることがある。「男らしさと女らしさ」は、体質や社会的条件によって形成される性格や行動様式などの面から男女それぞれの特徴をみようとするものであるが、性差を考える場合に男女の差異を単に肉体的性別としての男と女といった点から比較するのではなく、それぞれがどのような特性をもっているかといった観点から性差というものを考えるべきで、三つの観点を考えあわせる必要がある。一つは「男と女」、二つには「男性度と女性度」三つには「男らしさと女らしさ」であり、それらを総合した両親の養育態度による性差への影響<sup>5)</sup>は、父母の期待が、男女の男らしさや女らしさの形成に与える効果は、男女で異っており、その期待効果は女子に対するほうがより強い。本調査においても「男の子(女の子)のくせに……」といわれることに関しては、女兒の方が男児に比べて圧倒的に「女の子のくせに」といわれ、項目別にも男児は「態度に関して」と「友人関係」の2項目に限られるのに対して、女兒は「行儀」や「身の周りの整理整頓」など「その他」を含めて多様であったことは親の意識の問題である。

また「……くせに」といわれた時の気持ちが、「女に生まれて損をした」と21%の女兒が感じているのは、男児に比して言われる状況が多様であり、回数も多いことと、発育発達段階での要求とのギャップがあるものとする。男児よりも「らしさ」を求められる女兒は、「生まれてきてよかった」という問に対しても「よかった」と答えたものは6割に満たず、男児の9割近くが「よし」とするのは大差がある。このことはすでに家庭や社会、あるいは学校教育の影響下で性差別の意識を刷り込まれてしまっている子どもたちから、この意識をとり除くことが当然の問題だと考えられる。「女に生まれて損をした」と女兒が感じたのは「らしさ」を求められるほかにも、男児より早く思春期に入って、身体的・精神的な悩みや不安を持ち始めることも一因であろう。

学年別にみると「生まれてきてよかった」と肯定する子どもが、6年生が5年生より減少し、逆に「否定するもの」「どちらでもない」とする子どもが増加するのは、勉強がむずかしくなること、受験体制やそれに対する親の期待が大きすぎるためでもあると考える。

今日の社会では、人間の自由が最大限に認められ、人々は、自分で考え判断しなければならないしその行動に責任を問われるようになった。従って人々は、種々な情報を求め、多様な意識や価値観を

もつようになり、人生についても悩んだり、自分の生きがいを求めようとする人たちが出現してきた。このことから家庭教育も学校教育も、一人ひとりの子どもの人間性を尊重し、自ら考え、正しく判断することのできる子どもを育てるような教育の質的転換が求められているとよいであろう。子どもたちの、自から考え、正しく判断する力を養おうとするには、子どもたちの自からについての認識が問題となり、男として、女としての自分、子どもとしてや兄弟姉妹として、友人としての自分といった、種々の自己認識が、自主性を生み行動選択を適正にするし、親子や同性、異性と<sup>4</sup>の人間関係を確かなものにして、主体性を築いていく。そのために性や生命に関する教育が不可欠である。

本調査から異性と<sup>4</sup>の人間関係について、クラスの異性のプラス面として、男児は女児に対し70%が優しさを感じ、元気よさ、強さ、明るさ、おもしろさなども過半数の男児が感じているのに対し、女児は異性のプラス面を男児ほど感じておらず、マイナス面においても男児が女児より反応が高率であった。

さらに異性から「いたわってほしいか」「あげたい」に関する回答に対しても、男児の方が女児よりも包容力があり、女児はやや自己中心的なところが見られ、この期の女児は異性に対するいたわりの気持ちをもつところまで成長しておらず、男児の「好きな人がいるとき」いたわってほしい、そして「相手が好きな時」いたわってあげたいという気持ちは、女児には全くみられず、このことは男女の性生理が異なることに関連して、男子は、からだの性成熟が遅いのに、性意識や心理的欲求は、男子の方が有意差をもって早期に経験するという、つまり体の性成熟に先行して異性接近欲や性的関心を経験する<sup>5</sup>という男子の性構造をよく表わした結果といえよう。

クラスや学校が楽しいか否かは、遊びやスポーツを含めて、友人関係が一番大きな要因となっており、低・中学年までの自己中心的な交友関係から脱却して、同輩、仲間集団への同調、帰属を求める年頃にさしかかっていることが推察できる。

現在わが国では、生命教育を大切に、拡充させようという強い意向があり、国はさまざまな団体に対してその展開を試みようとしている。本研究でも多くの子どもが、自分が成長していくうえでのからだの変化を父母から教えてもらいたいと考えていること、そして、父母もその必要性を認めていることから、一つは性や生命の教育を家庭教育でどうすすめるかという情報を、父母に提供する社会教育の充実が望まれる。さらに、学校教育の中の家庭科を中心にしてというのも、重要な視点である。われわれは、調査結果を参考にして、授業実践をするための教師側の手続き、留意点を検討し、次のごとくまとめた。

1. 単親家族および単親家族で祖父母同居家族の児童に対する配慮として、保護者との連携を充分に行うこと。
2. 子どもの成育は、家庭の雰囲気と密接な関係があることから、親子の絆を自然に認識させるような教材を開発すること。
3. 子どもの性意識は、性成熟の主指標の始期には有意差が認められ、女児は平均7.68ヶ月早く、性意識や心理的欲求は男児の方が有意差をもって早期に経験するという性構造の性差に有効に働く教材を準備すること。
4. 子どもはまだ家庭との結びつきが強く深いものであるが、家族愛の意識については、はっきりしていないものが多いので、家族成立に欠かせない愛情と性を含めて、心情に訴えるような教材を工夫すること。

5. さらに、家庭生活に関する認識が主観的なものから、客観的なものへと進む教材を開発すること。

## 5. ま と め

「生命の教材化」にあたり、学習者の子どもとその保護者の生命に関する意識を調査した。結果は次の通りである。

### I 子どもの生命に関する意識

1. 家庭生活に関する意識：家庭の雰囲気が子どもの成育に影響を与えていることが明らかとなった。
2. 性に関する意識：男女の性生理が異なることに関連して、性心理にも性差がみられた。
3. 友人に関する意識：学校が楽しいか、否かの理由は、「友人関係」が最も高率で、異性に対し協力する気持ちは、男児の方が強かった。

### II 保護者の生命に関する意識

親子の絆は、子どもと母親間は安定していたが、父親間に若干の不安定さが見られた。

本研究をすすめるにあたり、調査にご便宜、ご配慮をいただきました附属長岡小学校前林利八校長ならびに木村輝子教諭に、および長岡市立栖吉小学校前金子久雄校長ならびに影山周也教諭に対し、厚く御礼申し上げます。アンケートにご協力いただいた児童、保護者の皆様に併せて深謝申し上げます。

## 参 考 文 献

- 1) 高橋類子・木村節子・木村輝子：小学校家庭科における生命の教材化（第一報）－研究の展望－  
日本家庭科教育学会誌投稿中
- 2) 黒川義和：高校生の性意識・性行動と形成要因について 現代性教育研究 8 28～37（1977）
- 3) 日本家庭科教育学会：現代の子どもたちは家庭生活をどうみているか 家政教育社（1984）
- 4) 北沢杏子：ひらかれた性教育 アニー出版（1984）
- 5) 間宮 武：性差心理学 金子書房（1980）